

論文の内容の要旨

韓国高麗時代における禅宗寺院の伝来と展開

韓 志晩

本研究の目的は、中国で禅宗伽藍が成立する時期及び南宋・元時代までの変化の様相を把握して、伽藍配置を中心に禅宗寺院としての特徴を究明し、なお、韓国の高麗時代における中国との仏教交流に焦点を置いて、高麗に禅宗寺院がどのような形で伝来されて、どのように展開・発展していったかを究明することである。本研究の通して得られた成果を要約すると次のようである。

□中国における禅宗寺院の成立と展開

唐代において禅宗寺院が独立する以前には、多院式伽藍の一院として、一般的に伽藍の西側に禅院という修禅の院があり、禅宗の僧侶もその禅院において修行していた。また、唐代寺院の庫院は、その機能、建築構成と伽藍配置上の位置において、後の宋代の禅宗寺院の庫院と共通している。これらより、宋代の禅宗寺院の伽藍配置を特徴付ける西僧堂・東庫院という伽藍配置は、唐代の寺院における西禅院・東庫院の伝統の上で生まれたものと理解される。百丈懷海は、それまで一部の禅院に立てられていた僧堂、方丈、法堂の諸堂宇を、彼が制定した清規に従って一つ寺院に構成し、また各堂宇における教化・修行と生活までの一切の作法を定めた人物として位置づけられる。また、百丈による「不立仏殿」の提唱は、百丈の直後の早い段階から守られなくなり、その背景には当時に寺院の建立と維持を支えていた世俗檀越による礼仏の要求があったと考えられる。なお、百丈が建立した寺院を始め、唐末から五代十国にかけて建立された有力な禅宗寺院の多くが山中に立地していた。

『禅苑清規』と大湫山密印寺から窺える北宋代の禅宗寺院は、『五山十刹図』に見られるような禅宗最盛期の南宋代における伽藍の体裁をほぼ整えていた。北宋代の禅宗寺院は、当時の他宗寺院と比べると、伽藍中心部を回廊で囲む構成、羅漢堂、経蔵、鐘楼、庫院などの存在、廡院と荘院の運営、そして寺院の経営を司る役職の存在、などは両者における共通点であった。これに対して禅宗寺院は、多院式伽藍ではないこと、仏殿が極めて少ないこと、法堂に仏像が安置されないこと、方丈と寝堂による住持領域の構成、修行僧と行者の修行・生活の場としての僧堂・衆寮と行者堂・行者寮の存在、そして衆僧の修行の面を助ける諸頭首とその寮者の存在などにおいて、他宗の寺院と異なる伽藍構成上の特徴を持つ。南宋代の禅宗寺院における伽藍配置は、仏殿・法堂と寝堂・方丈からなる中心軸上を仏の領域、僧堂と衆寮を中心とする伽藍西側を修行の領域、そして庫院・行者堂・行者

寮を中心とする伽藍東側を寺務の領域とする、という配置概念の下で行なわれた。

宋代の禅宗寺院における寢堂は、法堂における正規の上堂説法以外における住持接衆の場として、小参、普説、接客、住持葬式などの時に使われた。寢堂が方丈と共に中心軸上に立てられることは、住持を仏祖に代わった存在として尊ぶ、という禅宗特有の住持観の具現であった。元代の禅宗寺院では、寢堂が独立した建物として建てられることなく、方丈の内の一部に寢堂の空間が構成される形に変わった。

宋・元代の禅宗寺院における僧堂は、当時の禅宗寺院の伽藍を特徴づける代表的なものであるが、僧侶全員が集まる一つの空間であること、内部に聖僧が安置され、長連床（単）が設けられていること、そして食事の作法などの側面で、唐代の寺院における食堂と非常に類似しており、僧堂が唐代寺院の食堂を建築的原形として作られたと考えられる。また、南宋代の『五山十刹図』より窺える南宋径山寺の僧堂、詰組形式の組物を備えており、僧堂内における修行僧一人当たりには与えられた単の幅は 2.5 尺であって、僧堂の内堂は最大で 462 人程の僧を受容できる規模であったことが明らかになった。

宋・元代における禅宗寺院の修行僧は衆寮と僧堂の両方において掛搭を行い、各自の単位が定められていた。そのため、衆寮の建築規模は僧堂の内堂に収容できる人数に合わせて計画されたと考えられる。僧堂が坐禅修行の場であれば、衆寮は經典祖録の看読の他に、私物の保管や身の回りのことをする日常生活の場としても使われた。このような機能と建築構成を備えた衆寮は、北宋代には既に成立していた。南宋代からは衆寮で夜の食事（薬石）、楞嚴会、住持の普説（曹洞宗）なども行われるようになった。伽藍配置上において衆寮は、伽藍西側の僧堂に近くに位置する。また伽藍東側には行者のための行者堂と行者寮があり、行者寮も衆寮と同様に看読の機能があった。

□高麗時代における禅宗寺院の成立

統一新羅末から高麗初期に掛けて、入唐留学僧を開（山）祖にして成立した禅宗九山派寺院は、全てが山に立地しており、伽藍中心部は中門、石塔、仏殿、講堂（法堂）で構成され、場合によっては回廊で囲まれていた。このような立地や伽藍構成自体は、当時までの朝鮮半島における他の寺院とそれほど異なるものではなかったが、その理由の一つとして、9 世紀前半頃の唐には、未だ百丈懐海によって創られた禅宗寺院がそれほど広く普及されていなかったことが考えられる。一方、九山派寺院は、宝林寺が開山される 9 世紀中葉頃を境にして、寺院の立地と伽藍配置が変わっていく傾向が見られる。828 年開山の実相寺から 859 年開山の宝林寺までの前期に属する寺院の殆どは、山においても平坦地を選んで立地することによって、従来のような整然とした配置を取る双塔式または一塔式伽藍を造り上げた。879 年開山の鳳巖寺から高麗初期の 932 年開山の広照寺までの後期の寺院は、会昌の廃仏のため以前とは異なって開山祖の殆どが入唐留学の経験ができなかった。この時期に開山された寺院は、山の傾斜地に立地して、比較的自由的な配置を成していた。しかし、禅堂と禅室、法堂、方丈、祖師堂、そして開（山）祖の浮図などは、禅宗寺院の伽藍

構成要素として、唐から新たに導入されたものと考えられる。

高麗時代の中・後期の禅宗は、禅僧の往来による宋代の禅宗からの直接的な影響が殆どない状況の中で内在的な展開を成し遂げて行った。安和寺と高達寺を事例として見た高麗中期の12世紀頃における禅宗寺院の伽藍は、当時まで高麗の寺院の一般的な形であった多院式伽藍の中に、禅宗伽藍の要素として法堂、方丈、修禅施設、祖師堂などが備えられる程度であり、高達寺の場合は、伽藍の中で法堂と修禅施設を中心とする修禅院が別院を成していたと考えられる。

高麗後期の13世紀初頭の修禅社は、当時の武士執権崔氏の積極的な支援を受けて造営・拡張され、高麗禅宗の中心道場となったが、伽藍構成の内容からみると、それ以前の中期までの禅宗寺院とそれほど異なるものではなかった。「泰安寺仏像間閣記」に見られる13世紀頃の泰安寺の伽藍は、修禅社より充実しており、宋代の禅宗寺院の伽藍構成と通じる点が多い。一方、僧堂はあるものの食堂もあり、未だ宋代の禅宗寺院における僧堂制度と建築形式がまともに導入されていたとは考え難い。

□高麗時代末における桧巖寺の復原研究

高麗末の入元留学僧の懶翁が拡張した桧巖寺は、朝鮮時代に入って数回の修理が行われたものの、伽藍の構造が変わる程度の修理や、伽藍全体が焼失して再建されることはなかった。これは即ち、桧巖寺は朝鮮時代に数回の修理が行われたが、懶翁が拡張した当時の伽藍配置や殿閣の構成を多く維持しており、現在発掘された遺構を通じて、高麗末桧巖寺の姿を推定することができることを意味する。

高麗末に懶翁が拡張した桧巖寺の正庁と東・西方丈は、元代禅宗寺院の方丈制度に従って造られたものである。その中で正庁は住持の講礼や儀式の空間である寢堂、西方丈は住持の居処としての方丈、そして東方丈は他院の住持や賓客が留まる客位に当る。建築構成の側面において、中央に塼を敷いた正庁をおき、その左右両側にオンドル部屋を接続させた構成方式は、それまで高麗において行礼と居処の機能を備えた多様な種類の建物に多くに使われていたであった。高麗末に懶翁が重創した桧巖寺は、懶翁が十年間に渡った元留学を通じて経験した元代禅宗寺院の伽藍制度を導入し、それを高麗建築文化の土台の上で再構成し具現した結果といえる。

桧巖寺址における仏殿址の西側で検出された一連の遺構は、内堂と外堂及び明楼と明堂を備えた一棟の典型的な禅宗寺院における僧堂遺構であり、その反対の仏殿址の東側で検出された「日」字型の遺構は、内部に二つの中庭（天井）を設けた衆寮の遺構であることが明らかになった。

高麗末に懶翁が拡張した桧巖寺には、彼が長年の留学を通して直接経験した元代の禅宗寺院の伽藍が積極的に導入されていた。伽藍の構成要素においては、正庁（寢堂）と方丈から成る住持領域、僧堂と衆寮・把針、行者堂（東・西雲集）、諸知事の寮・香積殿・庫などから成る庫院領域、諸頭首の寮、そして羅漢殿の存在など、宋・元代の禅宗寺院に見ら

れる伽藍要素が充実に揃っていた。また、伽藍配置において、中心軸が設定されていることと、伽藍中心部が東西対称を成していることも、中国からの影響をよく現している。

一方、方丈、僧堂、行者堂、寮舎、客室など人々が睡眠を摂る堂宇には全てオンドルが設けられており、中国的な伽藍形式に高麗固有の生活様式を取り入れられて、自国化していたことがわかる。そして、衆寮が僧堂と同じく伽藍の西側ではなく、反対の東側に配置されていることも、宋・元代の禅宗寺院と大きく異なる点であるが、これは南北に細長い寺地の制約によるものと考えられる。また、このように衆寮が仏殿の東側に配置されることで、庫院も僧堂と対称する位置でなく、南側に下って配置されるようになり、結果的には宋・元代の禅宗寺院と多少異なる形の伽藍配置が造られた。